

第25回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2015年12月14日（月）13：00-17：00

場所：永田町合同庁舎1階第一共用会議室

出席者：

<委員長>

尾池和夫 京都造形芸術大学学長（日本地震学会）

<副委員長>

中田節也 東京大学地震研究所教授（日本火山学会）

<委員>五十音順

阿部宗広 自然公園財団専務理事（関係団体）

大野希一 島原半島ジオパーク事務局専門員（日本火山学会）

菊地俊夫 首都大学東京 都市環境科学研究科教授（日本地理学会）

佃 栄吉 産業技術総合研究所理事・地質調査総合センター代表（日本地質学会）

中川和之 時事通信社解説委員（日本地震学会）

成田 賢 全国地質調査業協会連合会会長（関係団体）

橋詰 潤 明治大学研究・知財戦略機構特任講師（日本第四紀学会）

平田大二 神奈川県立生命の星・地球博物館館長（日本地質学会）

宮原育子 宮城大学事業構想学部教授（日本地理学会）

目代邦康 公益財団法人自然保護助成基金主任研究員（日本第四紀学会）

<顧問>五十音順

伊藤和明 防災情報機構特定非営利活動法人会長

小泉武栄 東京学芸大学名誉教授

町田 洋 東京都立大学名誉教授

高木秀雄 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

渡辺真人 APGN 諮問委員

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順（同省内五十音順）

中原一成 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局総括担当主査

曾根 進 内閣府地方創生推進室内閣官房産業遺産の世界遺産登録推進室参事官補佐

窪田優希 内閣府政策統括官（防災担当）付 参事官（調査・企画担当）付

若杉友紀 外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官

福田和樹 文部科学省国際統括官付国際戦略企画官（日本ユネスコ国内委員会事務局次長）

西川太郎	文部科学省国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会）
柴田伊廣	文部科学省文化庁文化財部 記念物課文部科学技官
高尾 聡	林野庁国有林野部経営企画課 課長補佐
尾崎絵美	林野庁森林整備部計画課 調査調整係長
鹿嶋 誠	経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室
今村翔太	国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係長
池田喜陽	観光庁観光地域振興部 観光資源課係長
榎本 弘	気象庁地震火山部管理課地震津波防災対策室 調査官
橋口祥治	気象庁火山課 火山防災情報調整室 噴火予知調整係長
宮本利邦	環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室環境専門員
山本 豊	環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長

<事務局>

齋藤清一	日本ジオパークネットワーク事務局長
内藤朋子	日本ジオパークネットワーク事務局員
神谷方子	日本ジオパークネットワーク事務局員

委員長：10月から11月まで6箇所の現地審査をしていただいた。今日はその結果を踏まえて議論の上、結論を出し、最後に記者発表をする。ユネスコの正式事業にとりこまれることが決定された後の初めての日本ジオパーク委員会。その関連の議事もある。資料の確認と報告を事務局から。

事務局：資料の確認をさせていただく。資料1については前回の議事録。2から7までが現地審査報告書。公開版と詳細版があるが詳細版は委員のみとさせていただいている。8はアクションプランの提出状況について。資料9はユネスコ正式事業化に伴い日本ユネスコ国内委員会より本委員会を機関認証したいという文書案。そのほか番号はないが、アジア太平洋ネットワークの山陰海岸シンポジウムの報告概要、また霧島で行われた第6回日本ジオパークネットワーク全国大会の概要報告。38CはIGGPの規約概要、新たなユネスコジオパークとしてのガイドラインおよびロゴマークについて記載された資料。和訳についてはJGNの国際化ワーキングでの仮訳。正式なものは今後国内ユネスコ委員会のほうで内容を確認した後、正式なものとなる。A3かA4の図はユネスコ正式事業化にともなうユネスコとの関係図。現在のイメージであり、今後もう少し検討を重ねて修正していく。最後にユネスコ正式事業化に伴う記念フォーラムの案内とその翌日から行う研修会の案内を添付してある。次に活動状況報告。アジア太平洋ネットワークのシンポジウムの開催概要について。9月の15日から20日に山陰海岸シンポジウムが行われた。あわせてJGNガイドフォーラムが開催された。618名という多くの方にご参加いただいた。次に霧島で行われた全国大会は10月27日から29日に行われた。こちらも多くの方にご参加いただいた。延べ人数は8810名。こちらの報告書は後日正式な報告書がまとまるので改めてお送りする。来年度以降の申請の事前相談を行った。来年度の世界申請については桜島・錦江湾と霧島の2地域が世界ジ

オパークの推薦申請を行うことを表明している。日本のジオパークについては 9 地域が相談にきたが、来年度は箱根、筑波山地域、浅間山、鳥海山・飛島、月山、萩、下北の 7 地域が申請を表明している。11 月 17 日にユネスコの正式事業化が決定されたが、この件の議題については本日の議題 4 のところで行う。

委員長：議事に入る。委員顧問オブザーバー以外はご退出をお願いする。まず議事録の確認。すでにご覧いただいていると思うので会議が終わるまでに何かあればお申し出いただきたい。何もなければ確認済ということにしたい。

委員：資料が JGC のホームページに更新されていないので更新をお願いしたい。

委員長：再認定現地審査報告をしていただき、ひとつずつ決めていきたい。一箇所 15 分くらいで議論したい。議事次第の順で審議を行う。

再認定審査

<恐竜溪谷ふくい勝山>

委員長：私と宮原先生が現地に行き、廣瀬さんが同行された。心配していたが、驚くほどいろいろなことがうまくできていた。保留後、市長が自分で見てまわりずいぶん勉強されたようだ。市役所の体制を大きく変更していた。驚いたのは各部の上に各ジオパーク課を市長直結で新しくつくり、女性の課長が活躍されていた。全部に目が行き届く体制を市役所の中に作ったというのは特筆すべきことでよそでも見習って欲しい。それに伴い、ガイドの組織や旅行業界が活発に活動していた。恐竜博物館との関係を心配していたのだが、そこでもジオパークを紹介する体制が整って、学芸員の方がずいぶん理解を示している。県が積極的というわけではないが、たいへん進んでいた。その他のサイトも見せていただいた。かつて平家の落人の村で、たくさん家が残っているが人口は現在 1 名という集落があるのだが、家を直しながら建築工学の学生が改修して住み込んで活動する、1000 人規模で人が入ってくるようなことをやっていて、着地型観光として売り出そうとしている。旅行業界がジオパークというキーワードを入れて活動してくれている。地元で小学生をまきこんだ活動がボランティアで行われていたり、地元の人がえごまを積極的に栽培して、韓国から絞り機まで輸入して油をとるということをして大地との関わりを認識しながらジオパークのなかで活動していることが見られた。私としては十分盛り上がっていると判断して廣瀬さんには再認定の報告だけ書けばよいと言った。

委員：委員長がほとんど様子をお話下さったのでご理解いただいたかと思う。2013 年の 12 月の審査の際に条件付再認定で、その後 2 年間の様子を見てということで今回の現地調査になった。現地審査は、11 月 23-24 日の 2 日間で委員長、洞爺湖有珠山ジオパークの廣瀬さんと 3 名で行った。公開版には面談した方たちの名前が記載されているが、見学者として、佐渡ジオパーク、南アルプスジオパーク、白山手取川ジオパークが同行。主な見学先としてはキーとなる施設、キーパーソンがいるところに伺い、ヒアリングを実施。23 日は勝山市教育会館から交流センターまで、11 月 24 日はエコプロジェクトから勝山市役所までを見学させていただいた。公開版に沿って説明する。条件付再認定となった時の課題というのは、勝山市役所の関与が弱いということ、恐竜博物館との関係、協力体制が弱かったということ。勝山市はエコパークの取り組みもしており、エコパークとジオパークをどのように組み合わせていくのかということも明らかになっていなかった

た。その点が今回どう解決されているかということを中心にみた。勝山市は恐竜がメインテーマだが、一方火山、九頭竜川の暮らし、地形形成という要素にジオサイトがある。テーマとの連携が図られるようになってきているということと前回問題になっていた化石の発掘地については、事前に採掘計画に従って最小限の採掘がおこなわれている。環境汚染が発生しないような土砂流出について護岸の配慮がされていることと、掘り出された土砂について恐竜博物館において保管、研究がされており 2014 年に発掘現場の横に野外恐竜博物館が開設され、ジオツアーに活用されている。採掘後の土砂に関しては、かつやま恐竜の森で子供たちの化石発掘体験に活用されている。そのなかで貴重な発見があった場合は博物館のほうで保管するという流れがきちんとできている。海外産化石の販売は完全に取りやめられている。環境保全についても配慮がされている。教育研究活動は、恐竜博物館、福井大学との連携協力体制もできるようになっていた。博物館学芸員がジオパークに積極的に関与されている。特に 2014 年にできた野外博物館は博物館企画のバスツアーの中で地層やジオパークを意識した説明、野外博物館展示を見ることができた。白山手取川の人とのやりとりをしているのでできればジオツアーもお互いに連携していきたいとのこと。三番目の管理組織運営体制は非常に変わった点だと思う。条件付認定をうけて、役所内の機構が大幅に改められた。市長が協議会会長となりジオパークの担当部署がエコミュージアムの担当部署と統合した「ジオパークまちづくり課」、今年から起用された、市長特命の直轄になるジオパーク政策監と、各課ジオパークのアドバイザー、考古学の学芸員らの体制が整っている。基本的にジオパーク政策監の方が他の部署の方たちと連絡調整や月 1 回の会議のなかでジオパークの様々な協力体制の推進を図っている。3 頁のところではジオパークの関係者がエコミュージアムの関係者とのように融合しているかを記載している。エコミュージアムの活動が活発だったところにジオパークの関係者が働きかけを積極的にし、自分たちの個々の活動がジオパークにつながるということの気づきがすすんだと聞いている。エコミュージアムの活動の中にジオパークの視点が入れられ、えごまなどの特産物の開発とジオパークとの関係を模索している。恐竜博物館に関しては、隣接する恐竜の森にジオパークのビジターセンターの機能をもたせ恐竜博物館に来る人だけではなくて一般の方にジオパーク全体の取組を理解してもらうというようなこともしている。ガイドについては 15 名のガイドが活躍している。継続的に勉強会をしている。恐竜のみならず、火山や九頭竜川の地形形成などを意識したガイドツアーが工夫されはじめている。今年から「ジオツーリズムプラットフォーム構築事業」ということで旅行業者、ビジターと地域内着地型ジオツアーを結び付ける試みが始まっている。福井駅で降りて越前鉄道を利用したが、残念ながら福井駅ではジオパークの文字が見えず、ジオパークのパンフレットもなく、勝山市は盛り上がっているのに、福井市のほうはまだ不十分のように思えた。防災の部分ではジオパークの勉強が進んだ中で、雪国なので水害、雪崩などの学びをお客さんに示せるようなプログラム作りをするような努力がされていた。結論。2013 年再認定審査で条件付であったが、地域の人も真摯にうけとめ、ジオパークの活動がどういうことなのか、どう自分たちにつながるかを考えている。地元でジオパークに関わりたいという意欲的な団体もある。宿題には積極的に取り組んでいるし、その先を見据えた形でさらに積極的にジオパークを軸にして街づくりをしていこうという決意が市側だけでなく住民サイドにもかなりみられた。このように課題の解決に取り組んでおり、協議会が事務局組織の強化、エコミュージアムとの連携の発展、中核施設の整備、県立恐竜博物館との連携、化石販売の中止等、2 年間の短期間に指摘された多くのことが順調に改善されている。ジオパークに至

る導線整備は福井市駅前の見え方などはまだまだ課題があるのだが、条件付きとなった原因の多くが改善され、ジオパークに根ざした住民活動が大きく前進したということから総合的に判断し、新たに 2019 年までジオパークとして活動する再認定としたい。

委員長：2 年前に行かれた方で何かあれば。

委員：すばらしく進展した。イエローカードの効果がとてもあったと実感する。ジオパーク政策監はどういう人がなられたのか。エコミュージアムのほうが活発であるということだがそれがすべてジオパークまちづくり課の中に統合されたということで、住民側でエコミュージアムを推進してきた人達は当時ジオパークをあまり理解されていなかったのだがどう変わったのか。

委員：ジオパーク政策監の方はもともと市の産業振興の部長。ジオパークをきちんと観光産業振興に位置付けていきたいとのこと。エコミュージアムの活動をされている人に関しては、ジオパークの勉強、湿原の保全や赤とんぼの活動をされている人などが、ジオとどうつながるかということも勉強しながら市の人と一緒に活動することで、分けるものではなく両方できると理解するようになった。

委員：恐竜博物館が化石を掘り続けているが、掘り続けることによって生じる化石の枯渇にたいして何らかの哲学を持っているのか。

委員：博物館は今 4 期目を掘っている。すでに発掘し終わっているところは整備しなおす。掘ったところやものは子供たちの学習の場に利用し体験させながら残土も大切にしていく。野外博物館をつくったことで、何年の地層という看板を作り、保全して見せる形で整備がすすんだ。

委員長：外国から輸入した化石を売のをやめたというのはずいぶん進歩だと思う。

委員：地域活動の補助金制度である「わがまち元気醸成事業」が、当初はエコミュージアムのみに位置付けられていて普段の活動を補助するだけだったのが、ジオパークの関連事業と位置づけてサイエンスの裏付けをもった活動に展開をしていこうという意識にてんかんしているようだった。一方で、「ディノパーク」という恐竜の動く模型を並べた施設は、見ておもしろいが、博物館ほど科学的な説明もなく、どう伝えていけばいいか困っているとのことだったが、この点では現地では話があったのか。

委員：ディノパークは行かなかった。さきほどのような方について触れた発言はなかったと思う。博物館を中心にディノパークといった単に楽しむところ、学術的な裏付けのある博物館、ジオパークのゲートウェイである恐竜の森といったいろいろなレベルで整備されている。多様なニーズに対してはよくできている。ディノパークだけで学ぶというのは難しいが。

委員：東京の業者がつくったと聞いており、どこまでジオパークと連携しているのかは疑問である。

委員長：現地のボランティアがずいぶん理解をすすめてフィールドワークをやっているので期待できる。冬季はスキーのコースにして多様に使っている。また、博物館の内容を更新する予定なので、期待できる。

委員：サイエンスベースではないアミューズメント施設的な要素が強かったので、どうつなげていくか、きちんと意識していただきたいと思う。

委員長：博物館の学芸員の意識がはっきりしているし、掘っているところを野外博物館として見せているのが非常に良かった。

委員：個人的に観光しても楽しめるよいジオパークになった。しかし、2 年間で急いで整備したという感じはある。今後、組織や活動の持続性としての観点ではどうか。

委員長：ジオパーク政策監までおいているのでそうそう変えてはられないだろう。現地のボランティアの意識は長続きするだろう。

委員：政策監というのは永続的なものか。

委員長：それは市長が変わればどうかかわからない。地元の人がそういう市長を選ぶような活動がきているのではないか。

委員：勝山市の観光協会を来年度以降解体してまちづくり会社を作るということで、ジオパークの中心的な役割を担えるように古い料亭を改築して拠点にする。ジオパークが地域の産業と結びつくというビジョンを皆さんが共有している。持続性に関してはこれからおもしろいことをやってくれるだろうと期待している。

委員長：勝山市観光協会というのが表にでてこなかったのので聞いてみると観光協会は廃止して新しい会社をつくるとのこと。福井県の観光協会が非常に積極的にジオパークを認識して活動しており着地型の旅行商品を意識していることを確認した。

委員：ユネスコエコパークとの関係性と赤とんぼや隣の白山との関係で特筆すべきことがあれば。

委員：地元の女性の団体が中心となって、公民館の裏の田んぼをつかって赤とんぼをチェックしている。卵を採取し孵化させ放すまでを調べている。村岡山（むろこやま）という地元の山が火山であるということを経由して知ったことで、地域に興味を持って、子供たちを連れて登山したり火山の勉強をするといった変化もみられた。ユネスコエコパークとの関係は特に聞かなかった。白山手取川のほうとは今後、連携をしていくとのこと。今回、白山の方が見えていて、隣接するジオパークとの連携はすすんでいこう。

委員長：認定するという事によろしいか。

一同：異議なし。

<磐梯山>

委員：私と阿部さん、山陰海岸の松原さんと11月24日から25日に現地審査を行った。2011年に認定された際はたくさんの項目が指摘されていたが概ね多くのものが改善されていた。16項目について自己審査しており、概ね達成されていて5点満点で4、5が多い。その中でまだ達成されていない点として、民間企業との参画、外国語の対応、活火山であることのリスク情報の発信を自分たちで自己判断している。首長、協議会、商工会議所、観光協会、教育関係、ガイド、保全関係と面談し、住民との対話というユニークなセッションもあり、3人の審査員がテーブルにわかれてそれぞれ住民5人くらいと対話した。これは議事録に載っていないが、住民の考えがよくわかって、達成がまだ十分でないという点もよくわかった。住民がもっとジオパークに接したいと思っているのに機会が与えられていないと感じた。首長との会見においては、県から最初に提案された時の世界を目指すことが謳い文句、呪文のようにになっているようだったが中味はすすんでいる。ジオサイトについてはメインテーマを磐梯山の災害と復興を据えている。看板が整備され、ガイドが育っている。理想に近づきつつある。人間との関係についてはまだ不十分などころがあり、過去の災害から人間がどう関わったかということについては不十分なことがあると思う。農業で災害荒地を開発して使えるようにしたかというストーリーはできているので今後厚みを増していくものと思われる。保全の面では国立公園と強く連携している。国立公園の歩道から視界が遮られないかなどの視点場を作っておりガイドが点検し整備するというしくみを作っている。

点検する方法は、ガイド、協議会、国立公園の人が一緒になって開発したすぐれた保全方法だと思う。国立公園以外はまだ保全についてはきちんとしたものができていないので今後の展開に期待したい。教育については、防災について認定前からいくつかの学校で取り組まれてきたものがある。それがさらに発展されてきている印象をうける。地域住民についても防災教育がされている。国交省の火山防災フォーラムを開くなど、防災に関する教育には力を入れてきている。課題にあった教育委員会との連携については、きちんと連携をとり、学校のカリキュラムにジオパークをいれている。管理運営体制についてはやや弱いという指摘があり、今年の4月から専門職員が1人採用された。2町1村からそれぞれから商工観光課課長ともう一人が事務局をつくっているが実際に働いているのは専門職員1人とパートの2人だけ。このような体制では不十分であると指摘した。報告書にもきちんと明記したい。専任スタッフが各町村からでてくるというような人材強化が必要だし、会長のいる北塩原村の施設にある事務局をもっとジオパークの玄関に移すなどの工夫が必要。ジオツーリズムについてはレベルの高いガイドが存在する。しかし、いくつかガイドの組織があるが、ジオパークのもとで連携できていない様子がまだ伺える。ガイド養成講座は行っているが、ジオパークガイドとしての品質保証をするような制度はない。訪問者に何を学んでほしいかを共有する場ができていないのでそのようなネットワーク作りが今後必要。5つのジオストーリーがある。さらに、火山ができた舞台裏、2〜3回崩壊している中で生物多様性ができたということと、火山とともに生きる人々などの4つのサブテーマを置いている。それと8つの質問等をうまく組み合わせたパンフレットを使ってツアーをしている。だが、人々の関係についてのストーリーが十分にできていない点を改善する必要がある。住民参加についてはお見合いディスカッションでも感じたことだがまだ地域と一体化している感じはしない。ただしジオグルメの開発という試みはいくつかある。「岩なだれカレー」と「見祢の大石どどど井」など工夫をしている。国際対応は前回からあまり進んでいない。ただ解説板にはたくさんの英語が書かれるようになったがたくさん書かれすぎてかえって見にくい点もある。防災については教育上すすんでいる。活火山であるリスク情報の発信についてはまだいくつかの拠点に留まっている。問題はまだあるが、多くの項目で改善しているので再認定でよいという印象を審査員3人とも持った。特に指摘するとすれば事務局体制、ガイドネットワークの強化の2点を強く指摘したいと思う。

委員：ガイドツーリズムと保全を中心に見ようと思って行った。ガイドについては、動植物を中心にやってきた人がジオの勉強をしてとまどっていたり、難しい言葉を使ってわかりにくかったりということがここでは見られなかった。専門用語は使わずにジオ素人の私でもわかるような解説をして下さったので、うまくすすんでいるのだろうと思う。ジオストーリーについて、パンフレットでは、磐梯山の被害と人との関係がよく見えてこないと感じた。保全については、ジオパークにも国立公園についてもメリットがあるということで保全計画と一緒に作ったのは非常に評価できる。国立公園の外の文化財等にもなっていないジオサイトでJRや東京電力の土地にあるものに関しては看板を建てて了解だけもらったということだったが、土地所有者にもジオパークというものを十分に説明し、覚書を交わすなどをしてきちんと位置付けたほうが先方に重要性を認識してもらおうという点でもよいのではないかと思った。また、保全計画では環境省とうまくやっているのだが、今後、国立公園の標識の国際化なども環境省の予算をうまく使ってやったらよいのではないか。

委員：2年前のジオパークフォーラムのガイドツアーの中で、信仰と関係する部分がとってつけたようになっていたのでその点が気になっている。また、丸ノ内と東京駅の間に裏磐梯の観光協会の大看板があるのだが、景色はジオパークなのにジオパークと入っていない。指摘したら、観光協会は「ジオパークは3町村の行政でやっているの、観光協会事業は関係ない」ということを言われた。観光協会は協議会のメンバーなのだが、ジオパークをやっている意識は持っているのかどうか、何か聞くことは出来たか？

委員長：審査結果に盛り込むか。

委員：実際今働いているのは専門職員とパートの2人だけ。事務局には会議の時はでてくる人が各村から2人ずついる。専任体制がとれるようにその点は明記する。ガイドは信仰を含めいろいろなことを話すスキルを持っているが磐梯町のほうはジオパークに対して少し引いている。そういう意味で事務局体制をもっとしっかりさせたほうがよい。協議会の組織は非常にしっかりしてきている。部会もちゃんといて科学部会が特に強い。新しい発見を還元できる体制ができている。歴史や住民をとりこんだ形で展開できる工夫が必要。

委員長：そういうことを盛り込んで認めるということでよいか。

委員：結論は問題ない。詳細版の報告書の中で視点場を評価しているが、ここでの視点場の意味がよくわからない。ジオサイトのかかわりがどうあるのか、また使えるタームなのか。

委員：視点場はひとつのジオサイトに対していくつもある。ジオサイトを見られる良い所。

委員長：見どころを見る場所。

委員：景観の見せどころということでよく使っている。視点場という概念はジオストーリーを語る上で使ってもいいか。

委員：国立公園の中は実際には既に規制されているので保全計画を作る時にこれ以上何をすべきか、もともと議論にもなっていた。五色沼に葦が茂っていて見えない等の指摘があった。そこで見る場所をいくつか設定してそこからの景観を保全するという場所。

顧問：以前訪問して問題と思ったのは、3町村の連携があまりうまくいっていないということ。住民がジオパークに対してどう思っているか気になる。リーダーは「世界」と初めから言っていたが、そのためには他の地域を見てこないが無理と言った。

委員：おっしゃる通り磐梯町はどちらかというと引き気味。道の駅磐梯が今ビジターセンターになっており、入口が見栄えのよいジオパークコーナー。ジオパークが非常によく紹介されている。実際にはジオサイト、カルチャーサイトがあり内容的にはジオパークとよく連携している。ただ職員の意識がまだ追いついていない。

顧問：裏磐梯の噴火記念館が浮いているようだが。

委員：中は見ていないが、副館長は非常に熱心でもともとジオパークを焚きつけた方。行かれた時よりははるかに進んでいるとは思いますがまだ温度差はある。

顧問：寺社を誇りに思っている人達がずいぶんいる。ジオとの関わりが難しい。

顧問：詳細版23頁のところで、山体崩壊を2度起こしているとあるが、爆発カルデラの中に54年に結構な規模の爆発が実は起きている。それが地形を豊かにしている。その話がでないともったいない。そこを付け加えてください。

委員長：加えましょう。

顧問：1980年のアメリカのセントヘレンズという火山が崩壊して大噴火を起こしたが、その時磐梯

山タイプと言われた。山体崩壊という今のような地形ができたが、火山が崩壊して災害の傷跡が観光の資源になっている。日本でも北海道駒ヶ岳とかいろいろ事例はある。そういう意識、仕組みだという普及啓発を現地はどの程度やっているのか。観光客や住民に対してはどうか。

委員：説明版にセントヘレンズやフィリピンの山の噴火や崩壊の例があり、それらとの比較はきちんとしていて、ガイドをしてくれた学術顧問の人は比較しながら説明してくれた。4 万年前の崩れた現象については最近の研究成果を紹介している。

委員：資料の 15 頁でのジオパークの調査研究活動の現状で 2011 年以降の磐梯山を扱った学術論文のリストが少ない。学術情報のジオパークとして着実にすすんでいる地域だと思うので学術研究のフォローが弱いような気がするが。

委員：ここにでてきているのはそうかもしれないが、福島大学の先生は最近の研究をかなりフォローしてきちんと解説してくれた。リストには漏れているかもしれないが、かなりのことがうまくガイドに伝えられたりしている。

委員長：さきほどの顧問の話に加えてそれも書いておいてもいいのでは。

委員：顧問のご発言に関連して。磐梯山のほうでは噴火の後、植林活動をしたり復興にむけて観光地化しようとした動きがあったが、そういうことはジオパークの素材として扱っていないのか。

委員：新しく植林したところがあって、山体崩壊した後、どのように回復したかを説明しているのでもないわけではないが、まだうまく伝えられていないかもしれない。

委員：明治期の噴火の後には会津の醤油屋が変わり果てた地形を見て、東洋のスイスにしようという構想に基づき、裏磐梯の道路ができたり、私財をなげうって新潟から木を運んで植林したという歴史があるので、本来ならそういうところも関連づけて噴火災害の復興の部分とかストーリーがあるはずなのに弱い。

委員：指摘されたとおりに思う。

委員長：このへんで再審査の結果認めるということによろしいか。認めるということで結論づけたい。

<下仁田>

委員：教育委員会の責任者が誰も対応しないという状況。3 人高崎に前泊して上信鉄道で 1 時間ほどで現地に入った。看板などはあるのだが、ジオパークに来たと感じさせるものがあまりなかった。率直に言って、根本的には体制の問題が大きいと思う。ジオパークになった当初は教育委員会の中に推進室がおかれていたのだが、いつからか下仁田町の観光振興係にうつした。富岡製糸場と絹産業遺産群の荒船風穴が世界遺産となり、その文化遺産については教育委員会が担当、ジオパークは観光振興課が担当するという仕分けができたと思像する。そのふたつの連携がうまくいっていない。看板がわかりやすくなったところもあるが、まだまだ問題あり。ねぎとこんにやくが重要な特産だが科学的な意味を研究することがまだされていない。それぞれいいところと改善すべき点が多々ある。教育委員会で雇用された人が荒船風穴の説明をするが、そこでなぜ荒船風穴ができたことの説明がなかった。細かくてできないとのことだった。ガイドの人も一緒になっていないという状況。住民参加については下仁田応援団という体制ができて、やる気のある方が参加されているのは進歩だと思った。しかしツーリズムを基本にやっということができるのだが、まだまだ全体として足りない。7-8 年前に 1 万人いた人口が今、8 千人程度になっ

ている。これからどんどん人口が減っている中でジオパークを基本にすえて下仁田を活性化させるにはまだまだ問題がある。ジオパークを中心にして地域振興をすすめてもらいたいと思うので体制を今一度見直してもらいたい。それを再認定の条件にしないと自慢できるジオパークにはならないだろう。

委員：公開版のジオサイトと保全のところ。ジオサイトの科学的な説明が不十分なところがある。この地域でもともと活動している下仁田自然学校という地質学者の研究成果に基づいているところ、4年間の中で大きな進歩があったとは言い難い。看板は毎年予算をつけてわかりやすく変えられているが、日本列島の地質構造を地質の切り口で説明するところが、根本的にわかりにくい。地形地質を別の視点で説明することができていない。その後の調査もあまり積極的にされていない。地形学的に説明しようとすればできるところがされていない。ねぎ、こんにやくも。違う視点で説明しようとせずわからないところをそのままにしている。地学的な風穴としての価値でなく、世界文化遺産に認定された風穴はどういうものかという説明だけ。その地質構造とかも加えれば立体的な説明になる。世界遺産になった荒船風穴が下仁田の中にあるということで全面的に出してはいるが、ジオパークのなかの位置づけは不十分。教育委員会が管轄することになったのでジオパークの事務局としては把握していない。もともと地元で地質の調査をしていたグループによる教育活動は評価されていたが、その授業を実際に拝見した。中学生に非常に高度な地質年代の話などをしており、どのような教育をすればいいかということが共有されておらず下仁田教育学校にまる投げしている。地質学の高度な論文を書く人が教育の場でジオパークとして何を教えればいいのかということを共有していない。管理組織運営体制についてはさきほどおっしゃったとおり。ガイドの講習を受けた人達が応援団を作り勝手にやっている。自分たちが中心にやるというより応援する。観光協会が窓口になってガイドを紹介するという連携はとれているが、下仁田ジオパークのなかの位置づけは不明瞭。推進協議会では、来年何をするか意見を上げられるしくみがない。町の予算の中で一セクションが事業計画をつくっているが、どういふジオパークにするかの議論がない。応援団やジオパーク以前からあった下仁田自然学校は、それぞれの団体が連携はあるものの各自、自由にやっている。あまりシステマティックでない。学校教育の場では内容が難しすぎたり、簡単だったり。責任の所在、計画、がない。議会に対しては決算報告はしているが地域住民に情報が共有されているわけではない。四番目の地域持続可能な開発のところでは地域振興を中心にした。人口が減りつつある中、鉄道も世界遺産もあるので人は来られるが、具体的に観光によって地域をおこしていくのだからジオパークを利用してどうすべきかというのはあまり明瞭でない。意思決定機関がはっきりしないところ、地域の住民の声をすいあげるしくみができていないところなどいくつかの制度上の不備があるために、新しいやり方や、いままでのやり方がいいのかという議論ができていない。ガイドが応援団を自主的に組織し、実際に現地を案内してくれたが、内容的に問題があった。下仁田自然学校のガイドからは別の機会に聞いたのだが、一般向けでなく専門家向け。ガイド講習をうけ、次年から応援団として活動されている方たちは不正確なところがあり、全体をうまく伝える人がまだいない。養成講座はしているが、計画的にはない。商品開発もしており、座布団を地層にみたてて売っているなどもしているが、どういふことをしていけばいいのかがわかっていないような気がする。前回最初に認定されたときの宿題で対応できているのは一部分だけ。結論は3人の中でも少しもめた。条件付きの再認定を出して危機感を持ってもらうか。

委員長：明確な結論がないままだが。

委員：前は私と小泉さんで行った。「ねぎとこんにやく」について、ジオとの関係について科学的な裏付けが欲しいという指摘に基づいて、研究をすすめようとしたが、地元の人に反対されたと聞いている。ジオパークに取り組む覚悟はできているのかどうか疑問だ。

委員：協議会長は町長。何をしたいのかわからない。普段から考えていることとジオパークがうまくつながっていない。われわれにメッセージまで伝えられない。

委員長：ねぎとこんにやくの科学者はいるのか。

委員：科学者はいない。地域内比較すると土が違うのはわかっているが、どこがよいとか公表したくない。やり方はいろいろありそうだが。

委員長：それぞれの地域のお国自慢はでてこないのか。順位でなく、種類の違いという意識は。

委員：お国自慢はでてこない。下仁田ねぎブランドの差をつけたくない。

委員：テーマを変えたいきさつについて説明はあったか？

委員：テーマはあまり議論がなかった。いただいた資料には混在して、「ねぎとこんにやくジオパーク」と載っているものもあるし「大地の足音が聞こえる」というテーマのものもある。

委員：新テーマにしたということをホームページにも記載している。「日本列島の誕生をひもとく根無し山」というテーマが本当に下仁田のテーマなのか疑問に思う。一般の人にはよくわからない「クリッペ」という言葉だけを前面に出すのはいかがなものかと指摘したことがあるが、その点の考えについては何か言っていたか。

委員：特になかった。看板の中ではクリッペの説明はされている。クリッペのようなおもしろい構造地質的なものをあまり説明しないでジオパークをみせましょうというわけではない。それぞれのジオサイトで見せるものは基本的に変わっていない。テーマという看板の付け替えで、根本的に再構築されていない。

顧問：このジオパークはクリッペ抜きには成立しない。これが一番の目玉。しかし、これだけではおもしろくない。不通（とおらず）溪谷などおもしろい地形をもっと出したらどうかと指摘したことがある。忘れてしまったのかでてこない。ねぎとこんにやくは場所によって違うのではなく、上と下の段丘面で湿り気などが違う。場所の違いというより上と下の違いを調べてくれといったのだが。最下位の段丘面にかなり水っぱいところがあり、これを使って粘土をとって焼き物を作っている。課題がちっとも取り組まれていない。専門員は古生物が専門なので地形のことはよくわかっていない。

委員長：条件付がよいという理由を具体的に。

委員：ひとつには組織の問題。自発的にできた応援団、観光協会、自然学校それぞれの意思判断でやっけていいという認識。議論や計画がない。先にできた下仁田自然学校が決めたことに他は意見しにくい。それぞれでなく、ジオパークとしてやるということをみんながわかっていない。自然学校ではいろいろ地質を調べたりしていいのだが、推進室が把握していない。目指すところが見えていないで、やる気がある人だけがやっている、というのを変える必要がある。

委員長：2年後にそこがだめなら、だめということか。

委員：自然学校にしろ一応機能している。修学旅行生に説明もしている。

顧問：本宿カルデラの説明はないのか。最初に見つかったカルデラ。

委員：取り上げられている。古い時代の火山の堆積物がうまく浸食されて特徴的な岩峰のようにな

っているのですそれらと合わせてうまく説明すればいいのだが。ジオサイトを認識はしているが、うまく伝わるしくみがない。ガイドもほとんどアマチュアなので納得させられる説明にはなっていない。

委員：今の協議会が形になっていないのではないか。どう作り直すかが見えていないのなら2年で実行し、次の4年くらいみていくのがいいのかもしれない。

委員長：組織に関して具体的にこちらから提示して、地球科学的に見るべきものを列挙して、言われたことを見せるという条件をつけて2年後に再審査するというのか。条件を盛りこんだほうがよい。

委員：協議会そのものをまず変えたらよいというようなことを盛り込んだほうがいいのでは。

委員：体制が重要で、中身もかなり詳細に言わないと改善できないと考える。宿題としても明確なロードマップを見せてもらえないと難しい。

委員長：2年後までに委員の先生と連絡をとりながら実行するという条件を入れるということだろう。

委員：他のジオパークの協議会がどのようにしているかを見るべきだと思う。

委員：もっとネットワーク活動に参加してほしい。ジオパークがどうあるものかをわかっていない。

委員長：他のジオパークを見に行くことが非常に役に立つということを上司に認識させるという条件をつければよい。以上のことを2年後の再審査を受けるまでに連絡をとりながらすすめることを条件にして保留にする。そこでだめなら取り消しになることを申し上げておく。

<茨城県北>

委員：三人の審査員の見解は条件付再認定。公開版の2頁め、まずジオサイトと保全について。

国立公園、国定公園のエリアはないのだが県立公園があつて、県がある程度保全活動をしている場所でもあるのだが、インタープリターによるその説明がない。認識していない可能性がある。化石をどんどんとってあげてしまうということを普通にしている。二番目の教育活動。茨城大学が事務局なので地質情報活用プロジェクトのメンバーがインタープリターと連携して地域教育活動している。その中ではある程度学術的情報の質が保証されて提供されているが、それ以外の情報が学生のなかにはないので地質と他の情報をつないだストーリーがほとんど聞かれない。地層の話と歴史の話をしてその関係がわかっていないのにインタープリターはそれでよいと思っている。ジオストーリーがよくわかっていない。例えば岡倉天心という日本美術史に貢献した人の画廊があるジオサイトで、彼がどういう景観で美術をうみだしたのかの必然性の説明があまりない。すぐ炭酸塩コンクリーションの話ばかり出てくる。また風船爆弾の話とか。なぜその話題がジオパークにかかわっているのか、よくわからないまますすんでしまうジオツアーであった。茨城大学のなかでもジオパークに協力するという先生方が委員会をつくって活動はされているが、実際行っているのは茨城大学地質情報活用プロジェクトと退官された天野名誉教授。茨城大学理学部地質の先生が天心堂に津波の看板を設置したのだが、そこに茨城県北ジオパークのロゴマークが入っていないので指摘した。学内でもそのような連携がとれていない。協議会会長が学長なので、総合大学として様々な切り口で研究してほしいのだが、実際は大学内でも動いているのはごく限られた部署だけ。三番目の管理組織・運営体制。この中の課題としてはジオパークエリアである日立市、水戸市、大洗町が協議会の会員でなくオブザーバーとしての参加であ

ること。会員でないのにインタプリターが活発に活動している。本当にジオパークとして正式に認められているのかあいまいな地域でジオパークという名前が出され、ジオツアーが展開されているので困ったものだと思う。学長も、2市1町に対し、協議会員になるよう交渉はしているのだが、どうしても日立市は入ってくれない、理由はわからないという状況。事務局には3人おり、一人は臨時職員、事務局長と他の職員は兼務なので、とても7市町村をまとめる機能がない。次にジオツーリズム。ジオネットというインタプリターが作る自主団体があり、それが市町村の担当者と企業（旅行会社）、学生らと連携してジオツアーをきちんと実施している。JTBのウォーキングツアーには2-300人が参加し、インタプリターがそこで地域の見どころを紹介しながら歩く会が好評だった。活動はしているのに、ジオパークに行きたいがどこに聞けばいいのかわからない、茨城県北地域が何をやっているのかが見えないなど外への情報発信ができていない。5番目の国際対応およびネットワーク。英語の看板がある程度であり重要視していない。全国大会やJPGのパブリックセッションなどに出席して他のジオパークの人々との交流をほとんどしておらず、またそれでよしとしているのが問題。ジオパークの保全に対する考え方をジオツアーの中でどのようにストーリーを作っていくか、どんな看板がよいかを議論している中に参加してみないといけない。自分たちだけでよしと思っている「お説教的」な看板しかない。活動は懸命にやっているのもったいない。防災安全については東日本大震災の被災した箇所に津波の遡上高を表示したり、被災当時のビデオを上映したりしているが、それをどのように教育に活用しているかは確認できなかった。4年前の指摘事項の対応は現地審査の報告書のなかで10項目あり、それぞれの対応が書かれている。その中で非常に重要なものとして「ジオパーク事務局機能の大学から地域への移行」ができていない。ジオストーリーづくり関連が3つくらいあるが十分なものではない。コアセンター、サテライト施設の設置として茨城県庁の25階展望ロビーを拠点施設としたほか、高萩市にあるふるさと自然公園センター、ビジターセンターのような施設に拠点施設を作ったが、ここはインタプリターが手作りで資料を作っており、質的に少々問題があり、サテライト施設としては不十分。化石の発掘は行われていないと報告されているが、実体はそうではなかった。地質関係のジオサイトは充実しているが地球生態系のサイトはやや貧弱である。生物専門のインタプリターの説明については詳細版に記載しているとおり。地域の盛り上がり、インタプリターの活動はすばらしく、民間企業のサポート、筑波銀行をはじめとして地域の方の取り組みも素晴らしい。茨城大学の学生もそれにうまく参加しており地域が盛り上がっているのだが、事務局がそれを全く把握できていない。自分達はよかれと思って活動しているので質が落ちてきており、残念ながら化石を配ることもよしとしている。とにかく他のジオパークに行ってみよう。

委員：前回の課題に対してほとんどできていない。宿題としては指摘事項を2年間で確実に実行することがまず重要。それから組織の再構築。拠点施設も常設されているのではなくて、インタプリターが来て説明したりビデオを流しているだけ。拠点施設はあるといっているが、なきに等しい。

委員長：300名のインタプリターはジオパークのガイドとして養成されたのか？

委員：はい。茨城大学のガイド養成講座を受けてインタプリターが自主的に活動。インタプリター同士で研鑽し合っている。行政はお金を出さなくて、自主的に活動している。ボトムアップ的素地としてすばらしいが、ジオパークの質としては疑問。よそのジオパークの活動を見れば地

域の人の活動が変わる可能性もある。もったいない状況。

顧問：風船爆弾とジオとの関わりは？

委員：その説明はない。せいぜい、風船爆弾を飛ばすのにちょうどそこにジェット気流があったことや、風船爆弾を長時間飛ばすために必要なバラストとなる砂を調達するため海岸が近い、という程度。ジオとはほとんど関係ないのでジオツアーでいかないほうがいい。

顧問：4年前に視察に行った際、大学から運営母体を市町村に移すべきだと主張してきたのだが、だんだん市町村がそっぽを向くようになった。インタープリターは熱心にやっていたので、運営についてもっと考える必要があると思った。

委員：救いなのは、県のほうが、県北振興局を作ったこと。その三本の柱のうちの1本がジオパークによる地域振興を打ち出している。もう少し、県がテコ入れしてほしいと言っても一步引いてしまう。大学がやっているからとか市町村がやっていると言って県はなかなか動かないなかで、県北振興局を作って一応予算をとっている。県がもっと積極的になってくれるとよい。大学のほうは、持続性という観点からすると学長が今年なったばかりで2年後誰になるかわからない。天野さんの後任はいない。学長から指名されたジオパーク担当の教員もとまどっている。職員は文部省からの派遣で2年後にはまた変わってしまう。大学の組織自体が持続性に欠けている。

委員長：天野さんは内外のジオパークをよく見に行っておりよくわかっていると思うので部外者でも声が届くようにすべき。

委員：行政の人はこれでいいと思っている。しかしそれでは続かないということを知ってほしい。

委員長：インタープリターたちを有効にできるような組織の整備が主なところか。

委員：組織とエリア。

委員長：自治体の協力が必要だが可能性はあるか。それには県の協力がいる。トップダウンはよくないのだが県北とついているわけなので。以上のような条件を付けて2年後の審査を受けるということではよろしいか。

<秩父>

委員：3人とも再認定でよいとの結論。一度認定見送りされた後、運営体制を確立して県立自然博物館との連携などで4年前に認定されている。事務局の機能はある程度果たしており、人数は少ないのだが、連携した活動をしている。しかし事務局の機能は弱い。問題があることを認識しはじめているという点は、再認定の大きな要素。秩父もネットワークにあまり参加していない。改善点を5まで書いた。ガイドの活動が連携した組織づくり、事務局の体制の見直しが必要。5つの自治体があるうち、秩父市頼みでやってきたところが、実際は他の自治体でも活動が進んでいるのに事務局体制に反映できていない。全体で盛り上げていく点が弱い。その点を宿題としたい。良かったところは、天然記念物の面的な指定が国内で初めてここで行われる。日本のジオパークの見本になるような活動を秩父から行うべく、市町村を超えて、保全計画とジオストーリーをきちんと考えて作る予定である。これも今までの活動があったからこそ。行ってみて初めてわかったことだ。

テーマの見直しについては宿題にしようと思う。「ジオ学習の聖地」というのはとても今の秩父を表しているとは思えない。協議会長が、再認定審査を通じて首長と意見を共有できたことがよかったと言っていた。結論としては再認定でよいだろう。

委員：課題としては、事務局体制について秩父市が一手に引き受けている状況。他の地域からもサポートしてもらうのがよい。そうすれば1市4町という全体の取組として盛り上がる。そういう意味で首長さんと同じテーブルで議論できたのはよかった。埼玉県の自然博物館も熱心になってきているのはジオパークを盛り上げる一因になっている。ジオサイトが秩父地帯全体にあるのだが、見学が秩父市中心になってしまったため他の4町のジオサイトをどうつなげていけるか具体的な事例があるともっと発展する。住民の方が非常に熱心。そのへんがもう少し組織的に1市4町がつながればさらに良くなる。

委員長：秩父まるごとジオパークとっているのだから4町「まるごと」ですね。今回は秩父市を中心に？

委員：いや、全部見たが、事務局は秩父市で、それぞれの地域の活動でとどまっていた。再認定審査とおして連帯感は強くなっている。それをどう今後つなげていくとか、テーマ「ジオ学習の聖地」の見直しというのはこれから。

委員長：地質学発祥の地と言われているが、秩父古生層という言葉は今、どのように使われているのか。

委員：今は秩父中古生帯、秩父帯という名称で説明されている。

委員長：かつて秩父古生層という名称があったということは説明するのか。

委員：それはたぶんすると思う。

委員長：ジオパークの中でどのように言われているか。

委員：秩父帯、秩父中・古生層という言葉を使っていたと思う。

委員長：歴史をきちんと残してほしい。

委員：例えば、内容は今となっては適切ではないが、歴史的には意味がある看板がある。それを残して、その脇に新しい看板を作るという議論をした。そういう扱いはあるのだと思う。

委員長：歴史としての事実であるから残すべき。秩父全体が中山間地の盆地構造でひとつの文化圏を形成している。関東での位置づけは文化の面でもあると思うが。漫画のまちとの関係は。

委員：段丘の地形によってお蚕とか豊かな暮らしがあるというような説明をガイドさんがしている。漫画のまちとの関係はまだつながっていない。観光協会にいくと漫画のほうの打ち出しが強い。

委員：秩父電鉄がかなり協力してくれている。

委員長：認定するにあたり、どのようなコメントを入れるか。

委員：テーマと事務局体制の見直しをしてほしい。

委員：世界ジオパークを目指したいということだが、世界を目指すための議論や理解がもう少し足りない。

顧問：ジオサイトによっては看板も駐車場もないところがある。行き方がよくわからないのでは困る。

委員：看板は、当初、早稲田の学生が作ったもののままであり、問題を指摘した。ジオパーク以外にも国指定天然記念物という事業としてもやっていかなくてはいけない。それを両方活かしてコラボレーションしていけばよいものになっていくだろうという期待はある。博物館が積極的に協力したいと言っていたので期待できる。

委員：前回審査したとき、ジオサイトが広域に分散しておりそれらをどのように結び付けていくかがひとつの課題だった。バスツアーやオートバイのツーリングツアー、宮沢賢治をたどる旅で全

域ツアーなどをつくることのことだったのだが、今の話を聞くとまだ課題が残っているようなのでそのへんも宿題に入れてもらえれば。

顧問：白滝と伊豆大島は組織が弱い理由で条件付認定になったが、秩父は去年のこの2つよりは強いと判断してよいか。

委員：一定程度組織はちゃんとしている。

委員長：ボトムアップの活動がきちんと組織化されていると理解してよいか。

委員：それをもっと活かせる事務局が必要。

委員長：認定ということでよいか。

委員：一点だけ。和銅遺跡のこと。科学的な裏付けがない。ジオパークのジオサイトというには少し危険。お墨付きを与えることに疑問がある。

顧問：和銅遺跡は山地と盆地の境界の掘ったあとはすべて断層破碎帯で学術的に価値がある。ただし和銅遺跡に自然和銅が残っていたかは不明。

委員長：というような問題を、宿題として紹介してもらえたらよい。

<男鹿半島・大潟>

委員：結論として再認定としたい。理由として、認定時の宿題に全て対応していることに加え独自の活動として秋田県ジオパーク連絡協議会を作り八峰白神、ゆざわと一緒に事務局体制を含めて協議しながらやっていくとか、教育委員会主体なので小学校の教育から学校教員の教育までジオサイトを使ったモデルともなる教育活動をされている。またジオパークを地域に根付かせるために道の駅を使ったジオパークの宣伝など幅広く行っている。28名限定の認定だが、数より確実なガイドを養成するという方針のもと、わかりづらいジオの説明を工夫しておこなっている。課題としては、ジオポイントという使い方をしているということと拠点施設をジオサイトとしている問題。明らかに文化サイトをジオサイトとしているなど。整理していかなくてはいけない。100のジオポイントについてはどういう内容でジオポイントとしているか全て分類しており系統的にできているので今後の対応もしやすくなっている。研究活動についても秋田県連絡協議会を設立したなかで助成制度を作って、助成金を付与している。いくつか課題はある。拠点施設への導線がわかりづらいとか、学校教育的面を強調しすぎて一般の人が行きづらい点は解決していく必要がある。大潟村と男鹿市の事務局が非常にうまくやっではいるが二つでなく、ひとつにできないか。観光協会との連携もできつつあり、これからジオツアーを拡大していく。ということで、課題はあるが、再認定でよろしいかと思う。当初地質学的に偏りすぎているのではないか、という話があったが、今は出さないようにするという雰囲気が強くなっている。そうではないのに、誤解されていたところもあるようだった。なんらかの文化財に指定することによって保全しようとするやり方をしているが、グリーンタフの保全などを地域活動でしたらよいのではないかという指摘をした。大潟村には露頭はないのだが、男鹿半島からつながった地層が分布していることを説明したらいいのではないかと指摘した。大潟村は干拓で軟弱地盤であり、それとの戦いについてもっとアピールしてもよいと指摘した。全国の平野に対する問題もあそこから提起できるのではないか。干拓地を作ったことに対して優遇されたというイメージを地元の人は持っているのだが、あの干拓は採石場から石を持ってきて干拓できたとか、今では世界有数の野鳥の渡来地になったということもアピールするべきと指摘した。

委員：事務局が教育委員会であることで強い体制ができている。事務局の文化財担当者が中心になっているため保全に関しては万全。住民らが望むような保全ができればなおよいと思う。学校教育との連携、教育旅行を呼び込むなどはよくできているが、観光との連携が少し弱い。その点はNPOがうまく補っている。ジオスポット等の用語の整理の必要性が議論されてきたが、比較的容易にできそう。指摘事項についてはかなりの確に答えている。一方、地質を全面に出しすぎたとの指摘に忠実に対処するあまり、逆に偏ってしまわないように再認定の際は認識しなければならないと感じた。

委員長：ジオでなく文化施設だろうというのはどういうものか？

委員：たとえば丸木舟。それをジオサイトと言っている。丸太をくり抜いた舟をジオサイトとして展示している。言っている意味はわかる。岩場だからこのような舟を使っていたという。しかしそれはダイレクトなジオではないだろう。

委員：JGCでは、現時点でそれを良いか悪いかは議論していない。なので、本当に、ジオサイトではなく文化的なものは文化サイトというのが適切なのかどうか。

委員長：地元の方達がジオとの関係でどのように理解して伝承しているかに深く関わる問題なのでこちらから外すべきなどと言える問題ではないのではないかと。

委員：外せとは言わず、今後JGNの見解をみながらすすめて下さいと言った。また古城跡、遺跡の問題。土木遺産もある。

委員長：地元の方達がそれで大地とのしくみとの関わりで理解しようとしているのなら、それはそれでよいのではないかと。

委員：関連性は明確。

委員：前回伊藤先生と私が行った時は、地形地質のみが前面的に出過ぎているとは言ったが、隠せとは言っていない。

委員：ガイドさん達は地形地質を自分達の言葉で表現しており、昔からの民話と結び付けてジオを説明していたのはすばらしいと思った。

委員：拠点施設がまだないので、今計画中の学習館が大潟村と男鹿市の真ん中にあるので、そこを拠点施設にして事務局もそこに構えると言っていたように記憶しているがどうなったか。

委員：昔の若美町役場の1階が男鹿市の施設、2階が学習センターで拠点にしている。事務局は市役所。2名が常駐している。地域の参考文献のコピーが公開されている。

委員長：大潟に露頭がないとおっしゃたが、地形そのものが露頭。ボーリングのデータは展示されてないのか？

委員：浅い2, 3メートルくらいのはある。深い1000メートル近くのがあるはずだが。

委員長：その説明がないのはもったいない。博物館があるはず。

委員：干拓記念館。温泉ボーリングがあるのでそれを展示したらよいのではと言った。

委員：事務局体制についてはどうか。

委員：ふたつあるので将来的にはひとつにしたほうがよいのではと言ったが、不具合はなく連携はとれている。

委員長：それはそれでよいのではないかと。

顧問：ガイドを頼んだが、時間になっても来なかった。どこに連絡してよいのかもわからなかった。結局代りの人が来たが。そのガイドの説明にストーリーが全くなく、ガイドを雇う意味がないと

感じた。せっかくの機会に印象が悪くなってしまう。注意していただきたい。

委員長：ガイドは絞り込んで少数にしているということだが。

顧問：この地域は防災上大きな課題が潜在している。1983年日本海中部地震の大津波災害で男鹿半島では小学生13人が亡くなっている。液状化も発生した。驚いたことに日本海には津波は来ない、地震が来たら、浜へ逃げろという誤った言い伝えがあった。なぜそのような言い伝えになったかという1939年に男鹿地震で山崩れ、地滑りがおきた。山際にいたら危険だから海岸に逃げろという言い伝えになってしまった。問題は、日本海のプレートに沿って地震がおきているが日本海中部震源域と1833年の庄内沖の地震の震源域との間があいている。今の秋田沖と空白域の形になっているのでいつか起きる可能性がある。将来に備えておかなければならない。

委員長：だからといって今度は山に逃げろというわけにもいかないのです、地球の知識をきちんと身につけることが必要。

委員：その点は相当意識的に広報活動している。ガイドさんが説明することになっている。

委員：現況報告書に予算が示されている。大潟村と男鹿市で持っていて、推進協議会はまた別に予算を持っている。たとえば平成27年推進協議会が900万、男鹿市が3000万、大潟村が1500万。

委員：一応説明では男鹿市と大潟村でその割合で負担しているということだった。推進協議会だけでどれだけ使っているかという意味だと思う。

委員：他と比べると予算が大きい。

委員：解説板もすべてリニューアルしている。

委員：それはどのようなしくみなのか。ジオパークにどんどん予算をつけようという姿勢なのか。

委員：議会から承認をもらってやっている。議会が全面的にバックアップしてくれている。

委員長：結構なことではないか。再認定するということになるわけだが、さらなる進展を求める点を列挙するというようにする。

— 休憩 —

再認定審査結果プレス発表資料の確認と作成

(内容は各プレスリリースを参照のこと。議論については省略。)

秩父ジオパークの名称について

委員：我々は「秩父ジオパーク」で認定を出しているが、「ジオパーク秩父」という愛称を使っている。その愛称の使用希望がJGCに届いていたが、議論せずこちらから返事を出していない状態にある。

委員長：名称についてはそれも含めて認定するかどうか議論しているので、勝手に変更するのはよくない。報告書にはその点を明記することにする。その点は徹底してほしい。

ユネスコ正式事業化対応について

事務局：まず1つめ。資料9はユネスコ国内委員会より当委員会をユネスコの国内委員会として機関認証するという通知案。これを受け入れるかどうかお決めいただき、受け入れるのであれば1月に行われる予定の日本ユネスコ国内委員会の会議で正式に決まる。

委員長：他に選択肢はないのでこれは受け入れることにしたい。体制としては3月に任期が切れ、4月から更新される。手続き的には新しい委員会で議論をしてという来年度の話になるので、4月に委員会を開き新しいメンバーで改めて受け入れるということで回答したいと思うのだが。基本的には当委員会が受け入れるということで、対応すべきことがでてきたら委員長に一任するというのでよいか。

事務局：補足。38Cという資料。IGGPの規約およびガイドラインになる。この19頁4-4に国内ジオパーク委員会について記載されている。20頁の中ほどに委員会の構成例がある。ユネスコ国内委員会の代表とか政府の代表、環境関係文化、観光、世界ジオパークに認定されている地域の代表も記載されているので、これらの代表を入れるかどうか議論になってくる。本委員会の委員の任期が来年3月末に終了するので4月以降の各学会の推薦をいただくことになる。1月に入ってから各学会に依頼をする。

委員長：それぞれの学会に伝えていただくようお願いする。今のままの構成ですすめようと思っているが、もしそれで問題が生じたら委員長に一任することにしてほしい。伊豆半島GPには世界の推薦を出したが、ご存じのように見直しになった。注文に対してどうするかというのをまだ伺っていない。委員会としての推薦状はこのまま有効でユネスコプログラムに移行した場合にもそのまま使えるとしてよいかどうか決めたい。

委員：手続き上は再申請という形になる。もし伊豆半島が申請したなら1票とられることになる。その時は、新たに1つしか申請できないということになるが、その理解でよいか。

委員長：今のところそのつもり。推薦状を書きなす必要はないという認識でよいかということ。伊豆半島がユネスコに申請を出すとする来年度の秋なので4月の委員会で議論はできるのだが、伊豆半島の推薦状は有効ということによろしいか。

事務局：ユネスコ関係のところで1つお謀りいただきたい。この度日本ジオパーク委員会が国内委員会になるということでユネスコ国内委員会委託事業のほうにJGNとして企画提案したいと思っている。日本ジオパーク委員会の事務局をJGNがお手伝いするにあたり予算をいただきたいということもあり、JGNが企画提案して委託事業に申請することをお認めいただきたい。

委員長：それは十分要求してもらいたい。

事務局：資料の最後のほうにユネスコジオパーク誕生記念フォーラムを白山市で来年の1月23日に開催する予定。ユネスコからはマッキーバ氏、前ユネスコ事務局長の松浦氏からご講演いただく予定。

今後の予定について

事務局：5月21日としていたが、さきほど委員長がおっしゃられたように、新しいメンバーが決まってから4月に一度開催する必要があるかと思うが検討いただきたい。また、5月21日には予定どおり新年度の審査が幕張で行われる。

アクションプランについて

委員長：アクションプランはでていないところがある。その説明を。

事務局：資料8。2007年の認定のころ、最初はアクションプランというものはなく、課題は指摘されてはいるが、2011年以降にアクションプランという名前ができ、資料8は直近の提出状況をま

とめている。アポイ岳、洞爺湖有珠山は提出されていない。事務局にも確認した。39地域の現状は資料8のとおり。

委員：私の認識では、おおいた姫島にはアクションプランの提出を書きそこなった。桜島錦江湾は明確に書かなかったから提出がなかったということではないか。恐竜溪谷ふくい勝山については、今回の再認定で提出されてくるだろうし、白滝、伊豆大島は来年の再認定のときにその結果で条件付きでなければ4年間のプランを書いてもらうことになる。アポイと洞爺湖、おおいた桜島はどうすべきか議論をしなくてはいけない。

事務局：アクションプランは、審査結果報告書が委員長名で出され、それに対する対応策は当然地域としては考えている。アクションプランとして、審査結果に対して回答をもらうということを決めていただければ事務局から提出をもとめて委員に提示する。

委員長：ではそのことを議事録に記載し、この資料を添付してもらおう。該当するところで未提出のところは事務的に連絡していただくということではよろしいか。いままででているものの内容はどうか。

委員：アクションプランの内容は、再認定の時に見て、それをもとに再認定審査をしているという位置づけでいいという議論がなされた。

委員長：再認定の時まで見ないというのもどうか。

委員：審査研究会では、アクションプランは4年間提出したまま、再認定審査の時にそれに基づいて議論してもらえればよいではないかということになり、JGCでも了解してもらった。宿題レポート柴田主査であった話。それをこれからも同じ考えでいくのか。

委員長：現地審査された先生はレポートがでてきたらすぐ読んでおくとかは必要ではないのか。今回でいていないところがわかって追加を求めるとのことまで決まったので、でてきたら、どうするか？各委員に提出してもらおうのか？

委員：実際秩父に関しても、4年前に読んで返事を返しておけば誤解もなかったのではないかと思う。やはり審査に行った人が(アクションプランが)かえってきたら一旦、目を通して、誤解している点があれば、それに返事をするくらいのはできればやったほうがいいと思う。

委員長：審査員にアクションプランを見ていただき、次の委員会の時に問題があれば言うていただくことにする。全員が議論するとたいへんなことになるので。現地審査をした人は先方がどう受け取ったかを確認するということに決定したい。

委員：再審査の際に使うのですが、あれがゴールと思っている行政の方が多い。

委員長：審査というのはその時点で資格があるかどうかを見るのであって、そこで終わってよいということではない。4年後はその間の進歩を見るというのが目的である。それは常識として知っておいてもらわなければならない。その点は厳しく指摘すべき。

その他

委員長：今回が今年度最後の委員会となるが、他に何かあれば。

委員：ジオサイトという考え方について。ジオポイント、ジオエリアについて包含するような部分がJGCにあり、使用している地域があるのはあまりよくないと個人的には考える。その点について確認しておきたい。

委員長：定義された用語以外に今日は視点場というのがでてきた。明確に定義されているのはジオパークとジオサイト。それ以外は自分で適宜定義しながら作る場合はあるだろう。それはおのずから自然淘汰されるものであって流行るかどうかはわからない。

委員：保全のワーキンググループが継続的に議論を積み上げており、実際、ジオサイトにしても、領域を地図上で示せないと保全はできないだろうという議論になっている。文化財担当者のなかでも、領域を決めると土地所有者と相談ができてよい等の意見があり、ジオサイトの空間の広がりも考えなければいけない。現地の人が使用している用語を委員会として承認するという形でもよいのではないか。

委員長：今日はエリアとか地域住民などの用語もでてきた。

委員：ジオサイトに境界線をつけるということ？

委員：はい。

委員：なじまないのでは？例えば、流山は？

委員：ぼんやりと地図上では点ポツとなっている。どれがなじんで、どれがなじまないかの議論まではしていない。100～200をリストにするというのではなく、ひとつひとつ、カルテのように試みていかないとジオサイトにおける保全はできないだろう。よって、できるものから線を引こうというもの。

委員：ジオサイトは保全に関する議論だけではないのでは。

委員：いくつかのジオサイトが集まったエリアのことをジオパークというわけだが。ジオサイトを限ってしまうと、世界遺産がここだというのと似ていて、たいへん矮小化される可能性がある。

委員：その議論もすすめている。本当に地学的な価値があって教育にもツーリズム的に適当なところを限定的にジオサイトとしてその間をうめるマトリックスの部分に対しては他の地域とジオパークは違うのだからその何かしらの意味を同時に探っている。ジオパークの目的に応じた何かをして、その中で特に価値のあるところをジオサイトとして位置付けるとよいのでは。もう少し整理して提示したい。

委員長：定義の問題と境界の問題がある。

審査結果を今配付している。それではこれで終了とする。

以上